

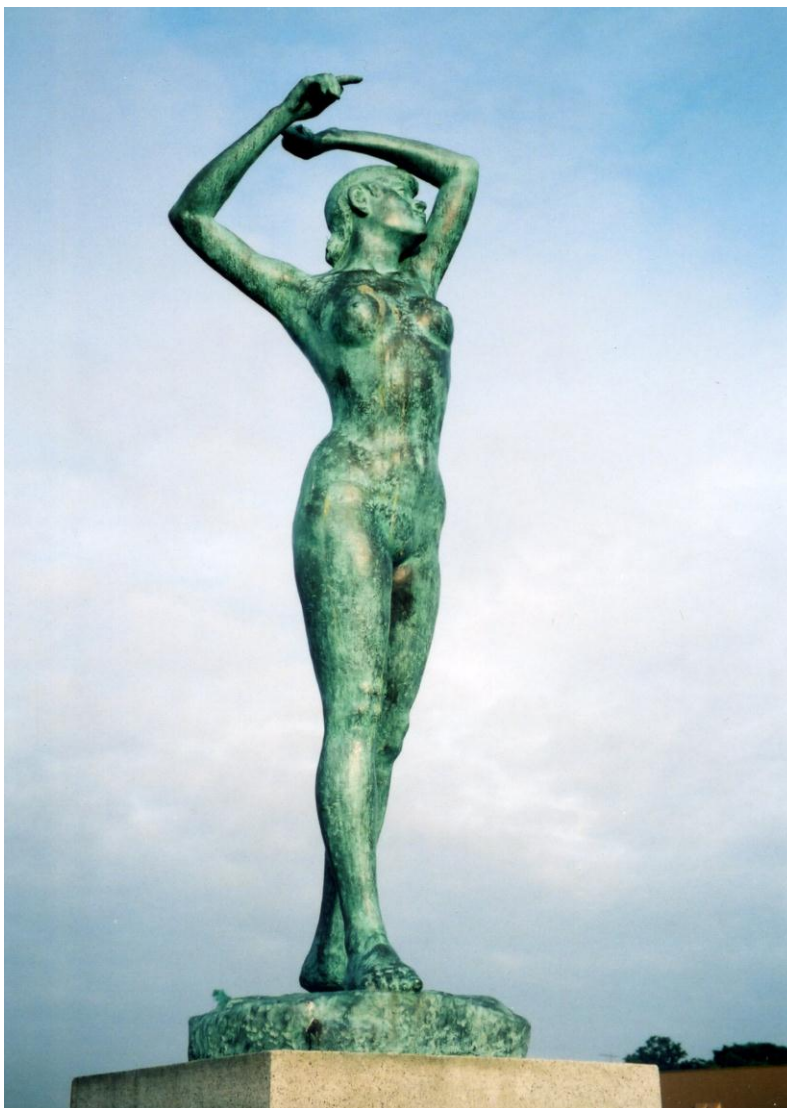
いづみ

第 26 号

2009 年 1 月 1 日発行

(題字: 國松 明日香氏)

本郷新彫刻シリーズ 26



《道東の四季・冬》

釧路市幣舞橋

(1977 年設置、ブロンズ
高さ 2.3m)

朝明けの橋の上、両手を高く
上げ右脚を半歩前に踏み出す、
本郷新独特の姿は動的な中に
詩情をたたえて美しい。

この像はもう1基、札幌にある。
かつて教鞭を執った南区真駒内
の光塩女子短大に設置されて
いて、明るい校舎で学ぶ学生を
温かく見守っている。

(写真・文 仲野三郎)

本郷新彫刻シリーズ 26「道東の四季・冬」	表紙
目次 彫刻美術館行事予定	2
巻頭言「札幌デジタル彫刻美術館の創設」	橋本信夫 3
山内壮夫生誕 100 年記念「《花の母子像》ものがたり」	松原安男 4
「白石齊・孝子二人展を終えて」	白石孝子 6
ミュージアムの窓辺から「美術と自然がおりなすユニークさ」	茂野浩一 7
「アトリエ訪問と國松明日香展に参加して」	安藤和昌 8
中島公園野外彫刻清掃に汗流す	長峯慰子、細川房子 9
「ホーレス・ケプロン之像」台座修復	橋本信夫 10
軌道に乗った友の会DVD制作	11
2009 年新年会予告、展覧会案内ほか	12

本郷新記念札幌彫刻美術館展覧会・行事予定（1 月—3 月）

本館	記念館	散策と美術鑑賞の会	教育普及事業
▼平成 20 年度後期収蔵品展 やさしさに包まれて —本郷新の母子像— —3 月 29 日まで 野外彫刻を含め 18 点を 制作した本郷の母子像の 彫刻、絵画を展示。	▼平成 20 年度後期収蔵品展 あこがれのヨーロッパ 120 日間のヨーロッパ滞在スケッチ —3 月 29 日まで 1952 年に初めて海外を 旅した本郷のスケッチ作 品など。	▼3 月 14 日（土） ステージⅥ 「春雪の三角山」	▼1月9日（金） 子ども（小学生）造 形教室 ▼2月 14 日（土）、 15 日（日） 造形教室（テラコッ タ）

本郷新記念札幌彫刻美術館 札幌市中央区宮の森 4 条 12 丁目 ☎011-642-5709

◇開館時間：午前 10 時—午後 5 時◇休館日：月曜日（月曜日が祝日などの場合は翌日）

◇交通機関：地下鉄東西線「西 28 丁目」駅下車 ジェーアール北海道バス「環 20」

山の手環状線 3 番乗り場、「彫刻美術館入り口」下車、徒歩 10 分

2009 年の初夢 「札幌デジタル彫刻美術館の創設」

札幌彫刻美術館友の会会長 橋本 信夫

北海道には開拓の歴史を刻むさまざまな野外彫刻が各地に多数設置されている。いずれも風雪にさらされながら美しい自然を背景に個性的な風情と存在感を示し、美術館の収蔵作品とは大きく趣を異にしている。

しかし、残念ながらこれまでこれらについてのまとまった資料がどこにもなく、その全貌をとらえるのはきわめて困難であった。こうしたことから仲野三郎会員が1985年頃から20年余を費やして道内各地の野外彫刻をくまなく調査して2,200余作品（全体の95%以上）の写真（10,000枚以上）と関連資料の収集に努め、ついに全道の野外彫刻の基礎台帳作りに成功した。

友の会ではこれを受けて2002年から資料のデータベース(DB)化を図るとともにインターネットによる写真の公開を目指すこととし、これを北海道大学大学院工学研究科の大内東教授に相談したところ、幸いにもこれがその後 “Hokkaido-Sculpture Web” として概要設計され、北海道情報大学に引き継がれて公開された。

一方、当会でも2006年から会員によって札幌市の航空写真と彫刻DBを組み合わせた彫刻地図コンテンツが設計され、さらに

市内彫刻300余点を対象にそれぞれの設置場所、材質、大きさ、特徴、汚れ、破損、設置経緯、解説記事、写真などの入力も会員の手でなされたことによってコンテンツ内容が大幅に改善され、ITを駆使した彫刻地図モデルとして札幌市内の野外彫刻情報の検索が可能となった。

これにより彫刻地図コンテンツは単なる野外彫刻鑑賞の手引きとしてばかりでなく、彫刻家の顕彰、美術教育、観光資源や管理保全などにも広く役立つものと思われる。

そこで今後は市内の野外彫刻を屋根のない美術館の収蔵品と見立て、これらの彫刻情報が集約された地図コンテンツを「札幌デジタル彫刻美術館」と名付けて Web による公開と活用を検討することとした。

2009 年の新春、大勢の彫刻ファンやITに精通したボランティア市民がそれぞれの経験や余暇を活かしながら「札幌デジタル彫刻美術館」の運営や基礎資料作りに参加することによって、この美術館が21世紀型国際文化都市サッポロに似合った市民文化活動の新芽として育てられ、発展する様を夢見ているのである。

《花の母子像》ものがたり

松原 安男(会員)

それは今から 30 年ほど前の、ある秋晴れの日に起こりました。

秋男ちゃん(仮名、当時 6 歳)は、お母さんと弟の三人で大通公園に遊びに来ていました。しばらくは、トウキビを食べたり、ハトに餌をやったりして、みんなと楽しく遊んでいましたが、お母さんが目を離れた数分の間に、秋男ちゃんは独り離れて、母子像の銅像の前に立っていました。

その銅像は、秋男ちゃんの弟くらいの子が母親と手をつなぎ、右手にはライラックの小枝を持って母親と一緒に、ゆりかごにでも乗っているように見えました。楽しそうに見えました。うらやましくなりました。銅像の母親と目が合いました。優しいまなざしで、何か語りかけられたような気がしました。

秋男ちゃんは、誘われるように銅像によじ登りました。けれど、銅像の母親の胸は冷たく、何も話してはくれず、秋男ちゃんを抱いてはくれませんでした。

がっかりした秋男ちゃんは、降りようとしたところ足を滑らし、銅像の左腕と胴体の隙間に顎が挟まってしまい、動けなくなっていました。

さあ大変です。異変に気がついた周りの人たちが助け出そうとしましたが、うまくゆきません。お母さんも飛んできました。

救急車も駆けつけました。でも、人の手では助け出すことができず、秋男ちゃんは「痛い、痛い」と泣き出してしまいました。

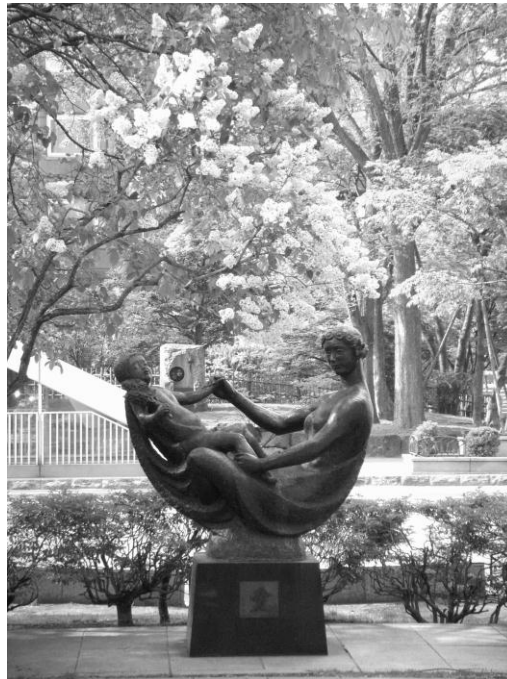
救急隊員が慎重に電動カッターを使ってようやく、秋男ちゃんは助け出されました。

ハラハラしながら事の成り行きを心配そうに見守っていた 200 人ほどの人たちから一斉に拍手がわきました。挟まれてから 35 分も経過していました。

秋男ちゃんにけがはありませんでした。でも、銅像の左手首の部分切断され、腕も半分位切り開かれて痛々しい姿になりました。銅像の母は、自分のけがには触れず「秋男ちゃん、けががなくてよかったわね」とでも言っているかのように変わらぬ優しいまなざしを向けていました。

翌日、母子像の事故を知った大勢の人たちが現場にやってきました。誰もが、人を助けるために美術品を犠牲にせざるを得なかったことについては仕方がなかったとしながらも、一刻も早く元通りに修復されることを願っていました。しかし銅像の作者であった山内壮夫先生はすでに亡くなっており、元通りに修復できるのか、美術品・芸術品に過度の安全対策は必要なのか、市の担当者は事後処理に頭を悩ませることになりました。

けれども一番悩んだのは秋男ちゃんのご



両親だったのです。当時の報道には個人情報保護といった面の配慮が少なかったためでしょうか、秋男ちゃんの両親に向けて非難の電話が職場までかかってくるなどしました。一家はノイローゼ気味になってしまいました。

困り果てた秋男ちゃんのお母さんは数日後、新聞の投書欄に「母親の不注意をおわびします」と投稿しました。「…あの優しい母の像の犠牲でわたしの子どもは助けられたのです。…母の像の腕の痛みは、これからは、わたしの痛みとして残ってゆこうと思います」

それに対して年配の主婦の方から「…像に与えた傷をわが痛みと自分の不注意を反省しておられる心情に、深く心を打たれました。…一日も早くブロンズ像の手が復元

され、やさしいポーズで、市民に憩いを与えてくれることを望みます」と感想を述べた投書が載りました。

事故から四カ月後、ようやくにして銅像の修復作業が行われました。修復は、この銅像を鋳造した東京の業者が担当しました。切断された面を溶接しやすいように鋸で切り直し、青銅を溶かしながら3時間ほどをかけて慎重に作業が行われました。ぴったり元通りに修復となった瞬間、見物人から「ほー」という安どの声が漏れました。それは「さっぽろ雪まつり」開催の数日前でありました。

ちなみに修理費は24万円かかりましたが、そのうち半額が寄付金で賄われ、差額を秋男ちゃんのご両親が負担したということです。

《花》は《愛》よりも強し？

この銅像は《希望》と同じ、山内壮夫が制作したのですが、台座には当時の市長板垣武四が揮毫した《愛》の刻字があり、《花の母子像》ではなく《「愛」の母子像》と呼ぶべき作品です。自らの腕切断という苦痛をいとわずに幼児を助けた母像の英断こそ讃えられてしかるべきです。

では、《花の母子像》と呼ばれるようになったのはいつ頃からなのでしょう？

昭和48年(1973)12月発行の「丸井今井百年のあゆみ」には、「創業百年を記念して大通札幌市庁舎前に『愛の母子像』を贈る」とあり、贈呈者側の心算では《愛の母子像》だったことが分かります(山内壮夫の日記にも「愛」と記されていたようです)。前記の事件報道においても、「愛の像」となっています。

《花の母子像》の初所見は、昭和56年(1981)10月15日発行の札幌の歴史を楽しむ会編「さっぽろ大通」(37ページ)に「花の母子像の名で親しまれている『愛』は…」とあり、ここで初めて《花の母子像》が二次的な扱いで見られます。また、同年発行

の原子修著「彫刻詩集 “札幌の彫刻をうたう”」(20ページ)では《花の母子像》として登場しています。

この書物発行以降から一般的に《花の母子像》と呼ばれるようになったのではないか、著者に問い合わせしてみました。著者からの回答は、昭和56年当時の札幌市公園管理課から出されている資料に基づいたものということで、《花の母子像》がだれの提案で、いつから使われているかは不詳ということでした。結局、作品名としては『愛』だけれども、市民の愛称としていつの間にか《花の母子像》という名前に定着したもののようです。(このあたりの事情についてご存知の方は、ぜひお知らせください)

確かに銅像の母親の頭には花冠が、子どもの手にはライラックの花が、そして季節には、母子を祝福するかのように、周りにライラックの花が見事に咲き乱れます。《花》は《愛》よりも強かったのでしょうか？ 《「愛」の母子像》の復活を願うものです。

「白石齊・白石孝子二人展」を終えて

画家 白石 孝子

昨年 10 月 18 日から 11 月 3 日まで本郷新記念札幌彫刻美術館で開催した「白石齊・白石孝子二人展」を終えて、「友の会」から原稿を依頼された。今回の二人展は、どちらかと言うと私が主導だったため、齊への原稿依頼を私が書くことになったことをお許しいただきたい。

本郷新夫妻の縁結びで 40 年

札幌彫刻美術館で 22 年前に白石齊の個展が開催され、ポスターなどの若干の費用が美術館から提供されて、入場券や招待状も印刷した記憶がある。しかし、今回の二人展はまったく違う。きっかけは、日本では珍しいイコンを公共の美術館で展示して見てもらいたいという私の母、柏村知子（友の会会員）の希望が発端である。幸い、昨年 4 月から札幌市芸術文化財団の傘下に入った本郷新記念札幌彫刻美術館にも貸し館制度があることを知り、急に実現に向かった。

ところが、私のイコンだけでは美術館を埋めることは困難である。思えば今年は本郷新ご夫妻に媒酌をお願いした結婚 40 周年であり、父は卒寿、私は還暦の年であった。その祝いを兼ねて「二人展」を開くことを、夫齊に頼み込んだというのが事の次第である。

陶とイコンによるオマージュ展

齊の陶と孝子のイコンを本郷先生の大きな写真を挟んで展示したことで、先生をたたえるオマージュ展になったことをとてもうれしく思っている。

今、私たちがアトリエを構えている岡山や他府県の友人、知人が、美しい紅葉に包まれた美術館を訪れて、感動してくれた。札幌在住の人で「初めて来た」という人も多かった。「友の会」の協力もあり、おかげさまで盛況のうちに終了できたことを心から感謝申し上げたい。また、新しい体制では初めての「貸し館」ということで、職員の方々には大変ご苦勞をおかけしたと思う。私達の特別展の会期中、各地から本郷新の作品を見るために来館した人たちもいた。そのような場合、専門の学芸員が対処してくれたらどんなに良かったかと思う。

財団化された美術館のこれからは、館と友の会が一致協力して、調和の取れた運営をされることを心から願っている。そのことが美術館に多くの人を招く力になるだろう。

美術と自然がおりなすユニークさ

学芸員

茂野 浩一

滝川市美術自然史館は美術館と自然史(博物)館が融合したユニークな施設として1986(昭和61)年に開館した。

1980(昭和55)年、市内を流れる空知川の河床から化石が発見され、新種の海牛の化石と判明し「タキカワカイギュウ」と命名され、その保存展示施設も兼ねた博物館として作られた。

美術の常設展示室では、滝川出身の日本画家で文化勲章受賞者 岩橋英遠(1903-1999)、同じく滝川出身の洋画家、一木万寿三(1903-1981)、兵庫県出身で滝川の書家との交流が縁で多くの作品を遺した書家、上田桑鳩(1899-1968)の作品を展示している。上田作品の収蔵数は日本一を誇る。

自然史の常設展示室では、北海道天然記念物に指定されたタキカワカイギュウをはじめ、ヨルダニカイギュウ、ステラーカイギュウなど海牛に関する資料を展示、ほかに、地球誕生をあらわすタイムトンネル、古生代のエリオプスやシーラカンス、中生代のティラノサウルスやカムプトサウルス、新生代のマンモスやオオツノジカなどの骨格標本、40メートルの古生物大壁画、人類進化に関する資料等、46億年におよぶ地球の生物と自然の歴史をたどることができる内容となっている。

個人や親子連れ、学校、グループ、団体等に利用されているが、知名度はまだまだという感が否めない。そこで、多くの方に足を運んでもらい、館を知ってもら

えるよう、最近では、企画展等開催の際には、特に子供向けに、ワークショップを開催したり、ロビーを活用したコンサートを企画したり、常設展示以外の部分にも力を入れ、これまで博物館に縁のなかった方々にも来ていただけるよう努めている。さらには地元地域の方々に何度も足を運んでもらえるよう今年度から年間パスポートを導入し、「地域に根ざした博物館」づくりを目指している。

そうした活動と平行して、学術機能として、美術資料、自然史資料の収集・保存・調査・研究活動等も行っていかなければならず、財政的にも人力的にも大変厳しいものがある。

他の公立の美術館博物館同様、指定管理者制度、行政パートナー制度など様々な形の運営を検討していかなければならないが、地域博物館の役割、必要性を訴えながら職員一丸となって健全な運営に努めていかなければならないと思っている。

なお、当館に併設する形で平成3年、「こども科学館」が開館。動く地球儀「プレートテクトニクス」や静電気実験装置「ヴァンデグラーフ」をはじめ、大型の展示装置から手作りの展示装置まであり、こどもの「なぜだろう」「不思議だな」という気持ちを大切に、科学の導入口としての役割、機能を担っている施設で、子供から大人まで楽しめる空間になっている。

◇滝川市美術自然史館 〒073-0033 滝川市新町2丁目5番30号 ☎0125-23-0502

◇開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

◇休館:月曜日 祝日の翌日 年末年始(12月31日~1月5日)

アトリエ訪問と國松明日香展に参加して

安藤 和昌（会員）

3年前に退職し、美術館巡りもいい趣味かなと思っていたので、初めて友の会の行事である國松明日香アトリエ訪問に参加しました。

國松先生には、大変失礼ですが、最初は「明日香」なので女性と思っていました。インターネットで検索して、札幌市民文化奨励賞、本郷新賞を受賞されていることを知りました。会報「いずみ」の題字も先生の筆で、会の顧問でもありました。失礼しました。

「NY株一時8000ドル割れ」と大きく新聞に出た、2008年10月11日朝、札幌市立大学に約30名が集合しました。

國松先生の案内で、有名な建築家の清家清さんが設計した大学の中を見学しました。斬新な明るい建物で、入口から約100mもありそうな渡り廊下の先に本館がありました。大学はデザイン科のみ。吹き抜けの天窓付きの空間の周りに、教室、研究室が並んでいました。

特に先生がアトリエにされている金工室は町の機械工場のように、溶接、切断機などの機械があり、主に土日ここにきて、一人でラジオを聴きながら、制作されているそうです。この3月に退官されるそうで、それらの機械が使用できなくなるのでさびしそうでした。

ついで、大学から歩いて5分足らずの芸術の森美術館に行き、そこで作品の鑑賞とトークショーを聞きました。

先生のお父さんの國松登さんの作品も

展示してありました。

先生の作品は道内に58点もあり、一人の作家としては、最も多いそうです。展示作品は①概念の造形（1983～1991）＝鉄製の板材で構成されている作品。「アラベスクな街」、「MUSE」、「休息する翼」など②風の表徴（1991～1999）＝市立高等専門学校教授時代の面と線による構成。「風のワルツ」、「風」、「風のポロネーズ」、「風の遺跡」など③観念の造景（2000～）＝短い直線とステンレス製の盤から構成された作品。「北北東の風」、「逆巻く水」、「THE MILKY WAY」の3期に分かれていました。私の気に入った作品は3点あり、「風のワルツ」は、帆に風を受け、軽快に進むヨットを連想、練習中の社交ダンスもこのように軽やかに踊れたらと思いました。「北北東の風」は冬山の厳しい吹雪と雪原の氷を、「逆巻く水」では沢登りの途中で出会った、滑滝の様子を連想しました。

トークショーでは、材料や塗料の腐食の話や野外彫刻の周りの建物の変化で作品が壊されるなどの話がありました。面白かったのは、厚別公園競技場にある作品「捷」は、本命でない方の作品が選ばれ、それが第4回本郷新賞を受賞したというエピソードでした。

私の趣味のヨット、登山、ダンスなど、自分の過去の経験から思い出す作品があり、楽しい展覧会でした。企画された皆様どうもありがとうございました。

山内壮夫「森の歌像」(高さ7m)もさっぱり

第2回中島公園野外彫刻清掃に汗流す

友の会が協力して行った中島公園モニュメント研究会の中島公園野外彫刻清掃作業が9月28日、友の会会員ら16人が参加して行われた。参加者から感想を寄せてもらった。



より深まった彫刻への愛情

長峯慰子（会員）

悪天候続きが心配だったが、その日は思いがけず絶好の秋晴れに恵まれた。

7点もある「森の歌」に脚立を伸ばし、彫刻のてっぺんまでもワックスを塗る。この1点に一時間半もかけた。若干やり過ぎだったかと反省も残るが、危険な作業を体験して、彫刻へのいとおしさをより一層実感したのは私だけだろうか。

公園には彫刻、モニュメントなどが14点ある。春の清掃に続いて2回目なので、背の高い彫刻の清掃に重点を置いた。4、5点もある「伸びゆく子等」は手順よく終わった。コンサートホール前の安田侃の「相響」は塗料を投げつけたような汚れに心を痛めた。

公園の中央広場にある山内壮夫の4点は前回の清掃が功を奏したか、余り汚れも目立たず、安堵した。

彫刻の清掃は回を重ねてゆくことで彫刻への愛着、さらには理解を深めることへの近道とも言えそうだ。

彫刻清掃にすがすがしい体験

細川 房子（会員）

弟が彫刻家であることから、彫刻には多少関心もあり、「彫刻の清掃ぐらいなら」という思いはあった。清掃方法などの説明を聞いた後、高さ7点の彫刻に脚立を立てて挑む。傷がつかないように注意しながらタオルで汚れを落とし、ワックスをかけて仕上げる。

彫刻の周囲の草刈もした。大きなゴミ袋3個分もあった。たまたま清掃中の作業員にゴミ袋を持っていってもらおうよう頼んだが、「そういう連絡は受けていない」とにべもない。上層部に掛け合い、今回だけ特別にとやっと引き取ってもらった。何となく心にわだかまりが残った。

それにしても、多くの彫刻が手入れもされず、悲惨な状態にあり、しかも作品の管理責任もはっきりしないとの実情を知り、残念に思った。

今年、生誕100年を迎えたという山内壮夫の作品5体、朝倉文夫の「木下成太郎」像など、今まで知らなかった作品まで清掃し、久々の肉体労働はすがすがしかった。この活動をこれからも大勢の人に浸透させたいと願った。

「ホーレス・ケプロン之像」の台座修復

友の会会長 橋本 信夫

一昨年秋、友の会が札幌西ロータリークラブの協力を得て行った大通公園の野外彫刻清掃作業で大通西 10 丁目の「ホーレス・ケプロン之像」の台座に亀裂があり、そのままでは倒壊の危険性が高いことを札幌市に指摘、改善を求めていたが、市が友の会の指摘を受け入れ、ケプロン像の修復を行っていたことがこのほどわかった。会の適切なアドバイスが札幌市を動かし、貴重な市民の文化財を危機から守った意義は大きいものとして、これまでの経過を報告したい。

札幌には現在、400 余の野外彫刻があるが、近年、これらの多くに汚れ、さび、破損が目立ち、清掃や保全が今後の大きな課題になっている。そこで友の会では 2005 年から市民向けの彫刻清掃法のマニュアルを紹介したビデオ制作に取り組むと同時に、町内会などを拠点に地域住民と一緒に公園や街路の野外彫刻清掃活動を展開してきた。

その一環として、昨年秋に西ロータリークラブと合同で実施したのが大通公園での清掃プログラムだった。彫刻の多くは等身大の大きさなので脚立なしの手作業だけで清掃が可能だが、異色だったのは大通西 10 丁目の「ホーレス・ケプロン之像」と「黒田清隆之像」。共に、1967 年の北海道開拓 100 年記念として設置されたものだが、いずれも 2.5 メートルの台座に本体も 2.5 メートルの高さがあり、地上からの高さは 5 メートルにもなる。したがって、建立以来ほとんど保全、補修はされていなかったようだ。

高さが 5 メートルもあることから、クレーン車による放水洗浄作業を取るようになった。国際ロータリー第 2510 地区から 12 万円の

助成が認められ、清掃作業が実現した。かくして、高所で作業を始めたところ、ケプロン像の本体を軽く押しただけで銅像が揺れることがわかった。そこで台座を良く調べたところ、上段と中段の石組みにいくつか亀裂のあることが判明した。

大型ブロンズ像がわずかな圧力で揺れる状態では台風のような大風や地震などで倒壊する危険性がある。ましてや人が多く集まる時に倒れたりしたら大変なことになる。直ちに公園管理事務所に専門的な検査と早急な対策の必要性を訴えた。

事態を重く見た札幌市はケプロン像の台座修復に 50 万円の予算を計上、2008 年 8 月に専門業者に委託、樹脂注入法による台座の補修を行ったという。

何はともあれ、銅像倒壊による大事が未然に防げたことは喜ぶべきことであろう。この体験を通して、市民が直接、芸術作品に対峙する彫刻清掃を経験することで、これが単なる文化財の美化作業としてではなく、彫刻芸術振興に関わる市民参加型の新しい文化活動の一つとして広く認識され、札幌に似合った美しい街づくりの一端を担えるようになればと願っている。



軌道に乗った友の会 DVD 制作

5 作目「山内壮夫生誕 100 年の軌跡」順調に進行 今春完成目指す

友の会が 2005 年から始めた映像制作活動がその後も順調に進んでいる。既にビデオ、DVD で 4 作を完成させ、中には美術館のロビーで映写され、来館者に貴重な視聴覚教材として活用されるなど予想以上の成果を挙げている。まったくのボランティア団体がこうした教材作りに取り組むケースは珍しく、玄人はだしの活動が注目を浴びている。

友の会がこれまでに完成させた作品は別表の通り。制作のきっかけは札幌市生涯学習振興財団が募集した視聴覚教材制作事業への応募。制作企画が同財団の選考に合格、制作委託を受けた形でスタートした。

処女作の「本郷新の一」は札幌市内に点在する本郷新の彫刻を映像で紹介したもので、本郷新生誕100年記念の年だったことから格好の企画となった。本郷の野外彫刻15点を選び、104カットを撮り、11分15秒の作品に仕上げた。

第 2 作は北海道の開拓に尽くした人たちの野外彫刻がテーマ。クラーク博士をはじめ、エドウィン・ダン、ホーレス・ケプロンらお雇い外国人、開拓判官・島義勇などの像を通し、街角の忘れられがちな野外彫刻が歴史的、芸術的にも優れた文化財であることを訴えた。

野外彫刻の宿命として、作品が粉塵と風雪にさらされ、汚れて町の美観を損ねている場合が多い。第 3 作では友の会作成のマニュアルに従って会員が大通公園の母子像を清掃し、町の美化に努力している姿を取り上げた。

友の会制作ビデオ・DVD

- ①05 年度 「本郷新の野外彫刻の魅力」
- ②06 年度 「時代を映す彫像―野外彫刻に学ぶ札幌の歴史」
- ③07 年度 「野外彫刻と街なかの美を守ろう」
- ④08 年度 「ブロンズ彫刻のできるまで」
- ⑤09 年度 「山内壮夫生誕 100 年の軌跡」
(仮題・作成中)

最新作である「ブロンズ彫刻の一」はブロンズ彫刻が完成するまでの工程を映像でわかりやすく見せた。彫刻家の全面的な協力を得てできた。類似の教材がほとんどないだけに貴重な作品。実際に道立近代美術館のロビーで上映され好評だという。

これら映像作品は、橋本会長を中心に素人集団の友の会会員がシナリオ作りから撮影、編集、ナレーションまですべてを試行錯誤しながら完成させたが、専門家の温かい協力も見逃せない。

「ブロンズ彫刻の一」では BGM に札幌交響楽団が演奏した札幌の作曲家星義雄氏の作品を著作権料なしで使わせてもらうなどの得難い支援を得た。

今春には第5作として本郷新と並ぶ郷土の芸術家・山内壮夫の芸術を紹介するDVD作品の制作が進んでいる。生誕100年を迎えた山内がその割には美術界で取り上げられていない中、ボランティア団体に過ぎない友の会が映像作品を通して山内壮夫の芸術に光を当てる意義は大きい。

2009 年新年会は 1 月 24 日

ときたますよ 講演会講師に常田益代北大教授

テーマ「ロマネスク彫刻・天使と悪魔の棲む世界」

2009 年の友の会新年会は 1 月 24 日(土) 午前 11 時から、昨年同様、札幌市中央区北 1 西 2、札幌すみれホテルで開催される。新年会に先立って行われる恒例の講演会の講師は北大留学生センター、同大学院国際広報メディア・観光学院教授の常田益代氏。演題は「天使と悪魔の棲む世界」で、同教授は美術史、建築史専攻で中世の建築史に詳しい。昨年、河出書房新社から、デザイナー、詩人などで知られるウィリアム・モリスの全容を明らかにした「図説ウィリアム・モリス―ヴィクトリア朝を超えた巨人」を上梓したことで知られる。

講演に引き続く新年会では余興に長峯慰子会員らによる「南京玉すだれ」が披露される予定。

新年会の会費は 4000 円(当日会場で)。参加申し込みは会報に同封した出席通知ハガキで 1 月 10 日までに斎藤美年子さんまで。

展覧会案内

■第15回みなもの会新春展

1 月 6 日―11 日、大丸藤井 7 F スカイホール (中央区南 1 西 4)

会員の日本画家・中野邦昭さん主宰するグループの展覧会。日本画と工芸作品を展覧。

■第 38 回 OKUI MIGAKU ギャラリーコンサート

「レガメ・カルテット コンサート」1 月 18 日 14:30 開場、15:00 開演。

モーツァルト「弦楽四重奏 22 番」、ドボルザーク「弦楽四重奏 12 番アメリカ」ほか。

OKUI MIGAKU ギャラリー (中央区旭ヶ丘 5-6-61 ☎ 521-3540)

参加費 1000 円。終了後、新年交流会を開く。交流会参加費は 1500 円。

会員交流フラザ

高橋淑子さん

ススキノで「淑子さんの美術サロン」開講

映像を駆使しながら、古代エジプトから現代までの芸術を解説する「居酒屋講座」を始めて間もなく 1 年。「教室」は札幌・中央区南 5 西 3、第 11 グリーンビル 7 階の「風雪酒場」(☎ 511-1802)。アートナビゲーターの資格を生かして、これまでに「浮世絵に見る江戸文化」「エコール・ド・パリの画家・藤田嗣治」「北海道の画家・三岸好太郎」などを語ってきた。お酒と食事をしながらの講座はなかなか好評。「淑子さんの美術サロン」は毎月 1 回。次回 1 月 9 日は「浮世絵『名所江戸百景』冬」がテーマ。午後 6 時 30 分―午後 9 時まで。料金は食事、飲み物つきで 3500 円。詳細は「風雪酒場」まで。

札幌彫刻美術館友の会会報「いずみ」No.26

2009 年 1 月 1 日発行

発行 札幌彫刻美術館友の会事務局

(札幌市中央区南 9 条西 4 丁目

7-1-1003)

発行人 橋本 信夫

編集スタッフ 斎藤美年子: 011-643-7246

大内 和: 011-884-6025